

## 研究論文 (Articles)

# 家事と稼ぎ手と育児役割実践の理解

——類型による役割分担の形態と心理的評価の包括的検討——

滑 田 明 暢・サトウタツヤ

(立命館大学大学院文学研究科・立命館大学文学部)

## Understanding Sharing Styles of Performing Roles in Family: An Analysis in Relation to the Satisfaction and Fairness Judgments

NAMEDA Akinobu and SATO Tatsuya

(Graduate school of Letters, Ritsumeikan University/College of Letters, Ritsumeikan University)

The present study aims to explore the relation between the relative amounts of performed roles in family and the satisfaction and fairness judgments towards them. We conducted a questionnaire survey with 153 (91 male and 62 female) participants who share and perform roles in family. Cluster analysis was used in order to understand groups of styles in performing roles in family such as household work, paid work and child-rearing. On the one hand, there was a standard style of performed roles in family which was following gender roles. In such style of performed roles in family, we found that men were mostly satisfied with household work and paid work whereas women were basically not satisfied in terms of household work and child-rearing. On the other hand, we also found the groups that were performing still derivative style of division of labor but had feelings of satisfaction and fairness with them.

**Key Words** : household work and paid work, child-rearing, feeling of fairness, gender roles, cluster analysis  
キーワード : 家事と稼ぎ手, 育児, 公正感, ジェンダー役割, クラスタ分析

### 1. 研究の背景と目的

現代の日本社会では、女性の労働市場への参加が進み、男女平等の考えに賛成する態度を示す人が増えてきている(内閣府, 2009)。一方、男女ともを含め個人が家事や稼ぎ手役割に費やしている時間の量をみれば「男は仕事、女は家庭」といった考えに沿った固定的性別役割分業の形で家事や稼ぎ手役割の分担が維持されていることも報告されており(例えば、大野・田矢・

柏木, 2003; 総務省, 2006)、性別役割に対する態度と実際の家事や稼ぎ手役割の分担実践の間には乖離がみられる。育児についても同様の様相が示されており、仕事をしながら育児にも積極的に関わろうとする意識がもたれていても、実際には育児に関わらない、あるいは関わる事ができないといった状況が存在するようである(例えば、矢澤・国広・天童, 2003)。夫婦における家事や稼ぎ手役割などの家庭内役割分担がどうして抱かれている考えや態度に沿った形で実践されない状態が継続されるのかという問

題は、いまだに議論が継続されている課題といえる (e.g., Dixon & Wetherell, 2004; Mikula, 1998)。

では、そうした抱かれている考えや態度が実践されていない現状の家庭内役割分担に対して、人々が不満感や不公正感を抱いているかといえ、必ずしもそうではないことがこれまでの研究で報告されている。なかでも、共働きで家事役割と稼ぎ手役割の両方を引き受けている女性でも必ずしも不公正感を抱かないことについては、これまでも注目され議論が行われてきた (Baxter, 2000; Gager, 1998; Hawkins, Marshall, & Allen, 1998)。トンプソン (Thompson, 1991) は、自身が家事を行うことによって得られる結果に満足し (価値づけ; Outcome value), 自身と同様の役割分担を行っている夫婦の役割分担と比較し (比較参照; Comparison references), 現状の役割分担を正当化する理由がある (正当化; Justifications) ときには不公正感を抱かないとする理論的枠組みを示した。この理論的枠組みは多くの実証的研究で確認されており、家事をはじめとした夫婦間の家庭内役割の分担に対する評価は量的衡平性の基準だけでは捉えられないことが示されている (e.g., Blair & Johnson, 1992; Freudenthaler & Mikula, 1998; Gager, 1998 前出; Hawkins, Marshall, & Meiners, 1995; Kluwer, Heesink, & Van de Vliert, 2002; Mikula, Schoebi, Jagoditsch, & Macher, 2009; Thompson の理論的枠組みの概観には、滑田, 2011)。

以上のように、量的偏りのあるように見える家庭内役割の分担を不公正とみなさない心理過程の存在が発見され、その効果が議論されてきた一方、一体何が不公正感や不満足感を導いているのかということに関しては十分に検討がされてこなかったように考えられる。例えば、家庭内役割の何を公正とみなし、何を不公正とみなすのかという判断は多元的であり (滑田, 2011 前出), 上記の比較参照の心理過程についても、自身が担い、実施している役割の量と、

自身のパートナーや友人、他者が実施している役割の量とを比べて公正であるか不公正であるかを判断している (Gager & Hohmann-Marriot, 2006)。このことをふまえると、自身の実施している役割分担の量や割合を度外視する形で、公正かどうかの判断が行われているわけではないだろう。

先行研究では、どのような要因が家庭内役割の分担量に影響を与えているか、あるいはどのような要因が実施されている役割分担への評価に影響しているか、のみが検討されてきたといえる。しかしながら、家事や稼ぎ手、育児役割をはじめとした家庭内役割の分担をめぐる諸相をより明確に理解するためには、実施されている役割分担量のみ、あるいは役割分担に対する評価や判断のみに焦点を当てるのではなく、分担量と個人による評価や判断の両方に焦点を当てる必要があるだろう。また、前述のトンプソン (Thompson, 1991 前出) の理論的枠組みを検証した研究のように、先行研究には比較的女性の役割として捉えられてきた家事分担だけを扱う研究が多かった (Kluwer et al., 2002 前出; Mikula et al., 2009 前出を除く)。そこで本研究では、家庭内役割分担を家事や育児だけでなく稼ぎ手役割も含むものとして定義し、実施している役割分担の量をふまえる形で、個人がどのように役割分担に対する評価や判断を行うかを検討する。具体的には、家事、稼ぎ手、育児役割の分担の実施形態とそれに対する満足さや公正さの判断との関連を検討することで、役割分担の実態を包括的に理解することを試みる。

## 2. 方法

### 2-1. 調査協力者と手続き

家庭内役割 (家事、稼ぎ手、育児役割) をパートナーとともに分担あるいは担い合っている男女 153 名 (男性 91 名, 女性 62 名) から質問紙

調査への協力を得た。本研究の対象となる調査協力者は、年齢の範囲が23歳から66歳と幅広いものであったが、家庭内役割分担に関しては性別や子どもの成長段階によって実情は異なると考えられたため、18歳までの第一子をもつ調査協力者を育児期、19歳以上の第一子をもつ調査協力者を育児後として、子どもの成長段階（育児期と育児後）および男女ごとに分析の対象とした。育児期の男性は65名、育児後の男性は26名、育児期の女性は18名、育児後の女性は44名であった。育児期と育児後の男女それぞれの記述的情報は表1にまとめた通りである。なお、子どもの成長段階については、育児により時間を費やすであろう段階を育児期、子どもから手が離れ育児にはあまり時間を費やさないであろう段階を育児後としたが、育児後の協力者は育児期の協力者に比べて年齢は高めであり、

それぞれ異なる世代的背景をもっていることが推測された。

質問紙調査は2008年に実施され、福岡、香川、京都、大阪の4府県の人々から協力を得た。質問票は数名の研究援助者を通して返信用封筒とともに配布され、郵送あるいはその研究援助者を通して回収が行われた。質問票の配布は調査協力者の合意が得られたときにのみ行われ、調査協力者には夫婦で相談せずに回答するよう伝えられた。調査協力者は匿名で質問票への回答を行った。調査協力者は全体で210名であったが、育児経験のある個人を本研究の分析および検討の対象とした。

## 2-2. 調査内容

質問紙調査では、家事、稼ぎ手、育児の各役割の実施量を把握するため、その各役割について

表1 調査協力者の記述統計

	男性 (育児期)	男性 (育児後)	女性 (育児期)	女性 (育児後)
平均年齢（標準偏差） と年齢の範囲	37.1 (6.5) 25 - 51 歳	52.9 (6.4) 43 - 62 歳	37.7 (6.5) 29 - 52 歳	52.4 (5.9) 42 - 66 歳
教育・最終学歴（%）				
中学校	0	0	0	4.5
高校	60	42.3	16.7	50
短大	12.3	0	44.4	29.5
大学（学部）	24.6	53.8	27.8	15.9
大学（大学院以上）	3.1	3.8	11.1	0
第一子の平均年齢（標準偏差） と年齢の範囲	7.8 (5.5) 0 - 18 歳	25.7 (4.9) 19 - 36 歳	9.6 (6.5) 2 - 18 歳	27.0 (5.8) 19 - 44 歳
就業状況（%）				
フルタイム (1日8時間以上)	100	92.3	55.6	43.2
パートタイム (1日8時間未満)	0	3.8	22.2	20.5
専業主夫 / 婦	0	0	22.2	27.3
その他	0	3.8	0	9.1

注1：小数第2位を四捨五入

て誰がどの程度担当しているかが尋ねられた。家事に関わる項目は、食事のしたく、食料品と日用品の管理、洗濯してから干す、洗濯物をしまう、居間の掃除、トイレとお風呂の掃除、ゴミ捨てるの7つであった。協力者には、各項目ともにリッカート尺度を用いた11段階評定（0：私が全部担当，5：二人とも同じ量，10：パートナーが全部担当）で回答を求めた。得点が高いほど、調査協力者のパートナーが行っている割合が大きくなるように配点された。稼ぎ手役割については、生活費を稼ぐことに関する1項目、育児役割については、子どものしつけ、子どもの日常の身の回りの世話、子どもと遊ぶことの3項目について誰がどの程度担当しているかが尋ねられた。協力者には家事と同様の11段階評定で回答を求め、得点が高いほど、調査協力者のパートナーが行っている割合が大きくなるように配点された。

実施している役割分担に対する満足度を把握するため、家事、稼ぎ手、育児役割のそれぞれについて満足しているかどうか、満足していないのであればどれくらい自分でもっと担いたいのかあるいは相手にもっと担ってほしいかが尋ねられた。協力者には7段階評定（1：自分でもっと担いたい，4：満足している，7：相手にもっと担ってほしい）で回答を求め、実施している役割分担に満足している場合には4点、満足せずにより自分で行いたいと考えている場合には小さい値の得点、より相手に担ってほしいと考えている場合には大きい値の得点になるよう配点した。育児役割に関しては、すでに育児期を終えている協力者からも回答を得るため、過去を回想しての回答ができるように設定していた。

個々の調査協力者が実施している役割分担全体についての公正感を測定するため、実施している家事、稼ぎ手、育児役割は総合的にみて公平であるかどうかを尋ねられた。調査協力者には7段階評定（1：自分にとって不公平，4：お

互いにとって公平，7：パートナーにとって不公平）で回答を求め、互いにとって公平と感じていれば4点、より自分にとって不公平と感じている場合には小さい値の得点、よりパートナーにとって不公平と感じている場合には大きい値の得点を示す配点とした。

### 3. 結果

#### 3-1. 育児期と育児後の男女ごとの記述統計

子どもの成長段階（育児期と育児後）および男女ごとの各指標の平均得点を表2および表3に示す。育児期と育児後の協力者ともに家事役割については、男性は各役割を1割から3割ほど担っていると感じ、女性は各役割の約8割から9割を担っていると感じていた。育児期の男女においては、男性がゴミ捨てるを4割から5割程度実施しているという認識であった。稼ぎ手役割については、育児期と育児後ともに男性が7割から9割ほど担っていると感じられていた。育児役割については、各役割で担当量にばらつきはあるものの、概ね女性が6割から9割を担っているという認識がもたれていた。

各役割の満足度については、育児期と育児後ともに男性では家事と稼ぎ手役割の満足度の平均得点が4点に近く、概ね満足している傾向がみられた。育児役割についてはもう少し行いたいと考えている人が一定の割合でいたことが示された。一方、女性では育児期と育児後ともに稼ぎ手役割について概ね満足している傾向が示された。家事と育児役割については平均得点が4点を上回り、よりパートナーに担ってほしいと考える人の割合が多かったことが示された。実施している家事や稼ぎ手、育児の役割が全体的に公平であったかどうかについては、男性はその役割分担を公平あるいは相手にとって不公平と感じており、女性は公平あるいは自身にとって不公平と感じていたことが示された。

表2 育児期と育児後の男女ごとの各指標の平均得点（家事・稼ぎ手・育児役割の実施量）

	男性 (育児期)	男性 (育児後)	女性 (育児期)	女性 (育児後)
家事役割				
食事の準備	1.4	1.5	8.5	8.0
日用品の管理	1.5	1.4	9.2	9.3
洗濯	2.1	1.0	8.2	9.1
洗濯物の整理	2.1	1.2	8.6	9.2
居間の掃除	2.1	2.2	8.7	9.1
トイレ風呂の掃除	2.8	1.8	8.1	8.9
ゴミ捨て	5.1	2.2	4.4	8.3
稼ぎ手役割				
生活費を稼ぐ	8.7	8.2	2.6	2.2
育児役割				
子どものしつけ	3.3	2.6	7.2	8.1
子どもの世話	2.2	1.4	8.3	8.9
子どもと遊ぶ	3.9	3.7	6.8	7.7

注1：小数第2位を四捨五入

注2：得点はリッカート尺度を用いた11段階評定（0：私が全部担当，5：二人とも同じ量，10：パートナーが全部担当）によって得られたため，表中の家事，稼ぎ手，育児役割の得点は実施割合としても読むことができる。例えば，8.5であれば8割5分の家事を回答者自身が実施していることを示す。

表3 育児期と育児後の男女ごとの各指標の平均得点  
（家事・稼ぎ手・育児の満足度と役割全体に対する評価）

	男性 (育児期)	男性 (育児後)	女性 (育児期)	女性 (育児後)
各役割の満足度				
家事満足度	3.8 *	3.8	5.5 **	4.8 **
稼ぎ手満足度	3.9	3.9	3.7	4.2
育児満足度	3.4 **	3.5 *	5.3 **	5.0 **
役割全体に対する評価				
公平感	4.6 **	4.7 **	2.6 **	3.3 **

注1：小数第2位を四捨五入

注2：「家事満足度」，「稼ぎ手満足度」，「育児満足度」に関しては，4点に近い得点は分担に満足していることを示し，高得点はパートナーにもっと担ってほしいと感じており，低得点は，もっと自分で担いたいと感じていることを示す。「公平感」に関しては，4点に近い得点は分担を相互に公平なものと感じていることを示し，高得点はパートナーにとって不公平と感じており，低得点は，自身にとって不公平と感じていることを示す。

注3：各役割の満足度および役割全体の評価に関しては，「満足している」あるいは「公平と感じている」得点を示す4点を取得した場合と差があるかどうかを検討する1サンプルのt検定を，育児期と育児後の男女の項目ごとに実施した。有意な差がみられた項目には，+( $p < .10$ )，\*( $p < .05$ )，\*\*( $p < .01$ )を示した。

### 3-2. 実施されていた役割分担の類型

どのような役割分担の実施形態があるのかを理解するため、子どもの成長段階（育児期・育児後）および男女ごとに階層的クラスター分析（Ward法）を用いて分析を行った。分析には家事役割と稼ぎ手役割、育児役割の実施量に関する各項目への回答を変数として投入し、実施している役割分担の形態ごとに協力者の類型クラスターを抽出した。調査協力者の人数が比較的多かった育児期の男性および育児後の女性からは3類型ずつ、育児後の男性と育児期の女性からは2類型ずつのクラスターを抽出した。各クラスターにおける役割ごとの実施割合の得点については表4、実施している役割分担の満足度および公平感の得点については表5、男女ごとの各クラスターの役割分担の満足度得点は図1、図2に示す。

育児期男性の協力者から得られた3つの類型クラスターは、それぞれ「分業型（M1）」と「分業一部参画型（M2）」および「分業手伝い型（M3）」と名付けられた。第一に育児期「分業型」の男性は、家事と育児役割の多くをパートナーが担い、自身は稼ぎ手役割の多くを担っていると感じていた。この類型における各役割の満足度の平均得点は、概ね家事役割においても稼ぎ手役割においても満足していることを示す4点に近かったが、家事役割についてはもう少し行いたいと考えている男性もいるという結果が示された。育児に関しては、平均得点が3.3であり、もう少し育児役割を担いたいと考えている傾向が示された。第二に「分業一部参画型」の男性は、分業型とほぼ同様の役割分担を実施していると認識していた。相違点はゴミ捨てを約7割担っていると認識していた点であった。各役割の満

表4 各役割の実施量を変数として投入したクラスター分析によって抽出されたクラスターの各役割における実施量

類型クラスター	N	食事の準備	日用品の管理	洗濯	洗濯物の整理	居間の掃除	トイレ風呂の掃除	ゴミ捨て	生活費を稼ぐ	子どものしつけ	子どもの世話	子どもと遊ぶ	
育児期 男性	M1 分業型	24	0.7	0.8	0.4	0.6	0.8	1.1	1.3	9.2	3.0	1.8	2.9
	M2 分業一部参画型	18	1.0	1.1	1.0	1.1	0.7	1.9	7.9	8.9	3.5	2.1	4.3
	M3 分業手伝い型	23	2.7	2.6	4.7	4.6	4.4	5.3	6.9	7.9	3.5	2.7	4.7
育児後 男性	M4 分業型	21	0.8	0.6	0.4	0.7	1.6	1.4	0.6	8.6	2.5	1.1	3.4
	M5 共働き型	5	4.6	4.6	3.6	3.4	4.6	3.2	8.8	6.6	3.2	2.6	4.8
育児期 女性	W1 分業型	12	9.5	9.6	9.8	9.3	9.7	9.4	6.2	1.8	7.6	8.3	7.5
	W2 共働き型	6	6.5	8.5	5.0	7.0	6.5	5.5	0.8	4.0	6.3	7.3	5.3
育児後 女性	W3 分業型	23	9.5	9.7	9.7	9.8	9.7	9.2	9.7	0.7	8.4	9.3	8.0
	W4 二重役割型	13	8.8	9.5	9.1	9.8	9.5	9.9	9.4	4.8	7.8	8.7	7.4
	W5 協働型	8	7.9	7.6	7.2	6.7	6.9	6.5	2.6	2.5	7.2	8.4	7.0

注1：数値は小数点2位で四捨五入

注2：行のスペースで類型を区切っている。数字は割合を示している。例えば、9.6は9割6分の役割を自分が担っていると感じている。

注3：Mは男性、Wは女性のクラスターを指す。

表5 クラスターごとの各指標の平均得点（家事・稼ぎ手・育児の満足度と役割全体に対する評価）

	類型クラスター	N	家事満足度	稼ぎ手満足度	育児満足度	公平感
育児期 男性	M1：分業型	24	3.7+	4.0	3.3**	4.9**
	M2：分業一部参画型	18	3.8*	4.3	3.5*	4.4+
	M3：分業手伝い型	23	3.8	3.5+	3.4*	4.6*
育児後 男性	M4：分業型	21	3.8	3.9	3.4*	4.9**
	M5：共働き型	5	4.0	3.8	3.8	4.2
育児期 女性	W1：分業型	12	5.7*	3.8	5.5*	2.7*
	W2：共働き型	6	5.2+	3.5	5.0	2.5*
育児後 女性	W3：分業型	23	4.8**	3.8	5.3**	3.4*
	W4：二重役割型	13	5.2*	5.2**	5.1**	2.6**
	W5：協働型	8	4.1	3.9	4.1	3.9

注1：数値は小数点2位で四捨五入

注2：「家事満足度」、「稼ぎ手満足度」、「育児満足度」に関しては、4点に近い得点は分担に満足していることを示し、高得点はパートナーにもっと担ってほしいと感じており、低得点は、もっと自分で担いたいと感じていることを示す。「公平感」に関しては、4点に近い得点は分担を相互に公平なものと感じていることを示し、高得点はパートナーにとって不公平と感じており、低得点は、自身にとって不公平と感じていることを示す。

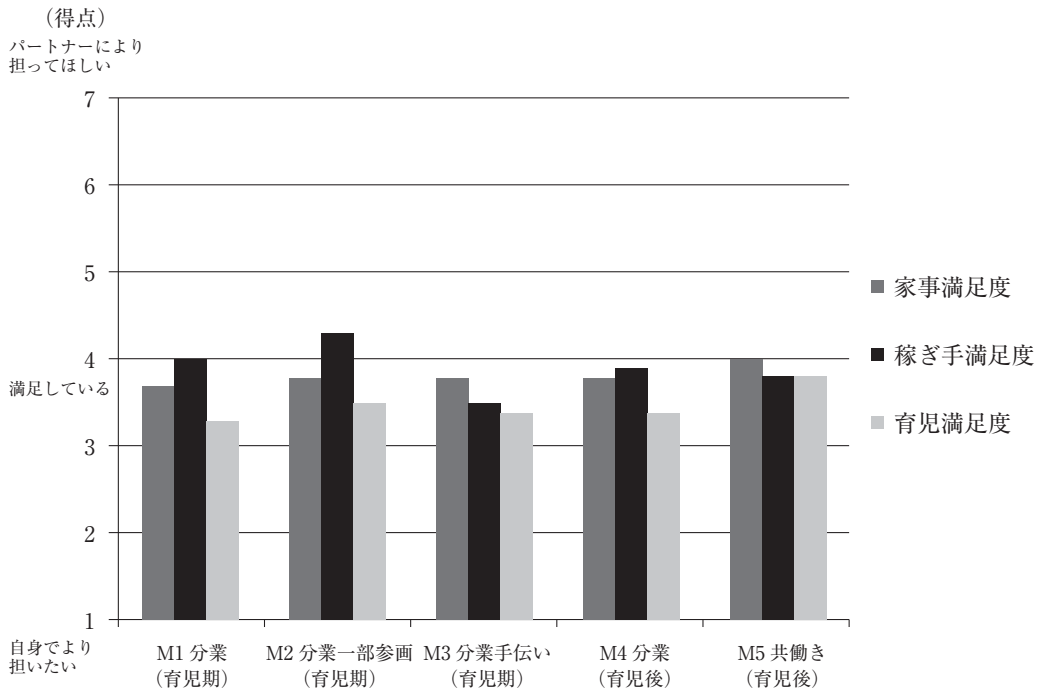
注3：「満足している」あるいは「公平と感じている」得点を示す4点を取得した場合と差があるかどうかを検討する1サンプルのt検定を、各クラスターと項目ごとに行った。有意な差がみられた項目には、+( $p < .10$ ), \*( $p < .05$ ), \*\*( $p < .01$ )を示した。

図1 クラスターごとの各役割の満足度得点（男性）

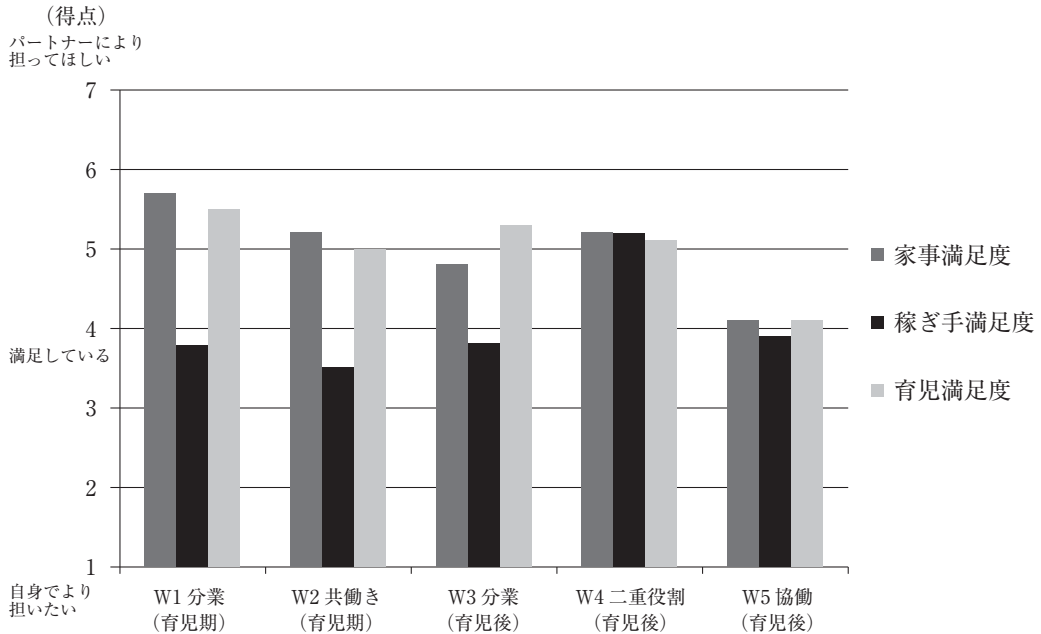


図2 クラスタごとの各役割の満足度得点 (女性)

足度も分業型と同様の傾向がみられた。第三に「分業手伝い型」の男性は、項目によってばらつきはあるが約3割から7割の水準で家事を実施していると感じていた。家事については満足しながらも、稼ぎ手と育児役割についてはもう少し担いたいと考えている傾向が示された。上記3つの男性の類型では、役割分担を全体的に公平か相手にとって不公平と感じる傾向が示された。

育児後の男性協力者から得られた2つの類型クラスターは、「分業型(M4)」と「共働き型(M5)」と名付けられた。育児後「分業型」の男性は、家事と育児役割の多くをパートナーが担い、稼ぎ手役割の多くを自身が担っていると感じている点では育児期の男性の分業型と近似していた。各役割の満足度についても、育児期男性の分業型とほぼ同様の平均得点が示されていたが、家事については満足している傾向が示された。育児後「共働き型」の男性は、ゴミ捨ての約9割とその他の家事役割の3割から5割程度を担っていると感じていた。この育児後「共働き型」

の男性は、各役割の満足度得点および公平感も4点に近い得点を示しており、実施している役割分担には総じて満足および公平であると感じている傾向が示された。

育児期の女性の協力者から得られた2つの類型クラスターは、「分業型(W1)」と「共働き型(W2)」と名付けられた。育児期「分業型」の女性は、多くの家事および育児役割は自身が担い、稼ぎ手役割の多くはパートナーが担っていると感じていた。稼ぎ手役割の満足度の平均得点は4点に近く、満足している傾向が示された。一方で、家事と育児役割については5.7点と5.5点であり、よりパートナーに役割を担ってほしいと感じている傾向が示された。育児期「共働き型」の女性は、ゴミ捨て以外の家事役割および育児役割の半分以上を担っており、稼ぎ手役割もおよそ4割を担っていると感じていた。稼ぎ手と育児役割には満足しており、家事役割についてはよりパートナーに役割を担ってほしいと感じている傾向が示された。この2つの類型では、実施している役割分担は自身にとって不公平で



あると捉えられる傾向が示された。

育児後の女性協力者から得られた3つの類型クラスターは、「分業型（W3）」と「二重役割型（W4）」、「協働型（W5）」と名付けられた。育児後「分業型」の女性は、ゴミ捨ても含めた家事役割および育児役割の多くを自身が担い、稼ぎ手役割の多くをパートナーが担っていると感じていた。役割に対する満足度に関しても、育児期の分業型の女性と同様に、稼ぎ手役割には満足しながらも、家事および育児役割に対しては満足していなかった傾向が示された。実施している役割全体に対する公平感得点は3.4点であり、自身にとってやや不公平と感じていた。育児後「二重役割型」女性は、多くの家事と育児役割を担っている一方で、稼ぎ手役割も5割に近い形で担当していると感じていた。各役割の満足度に関しても、家事と育児役割に加えて稼ぎ手役割についてもよりパートナーに担ってほしいと感じていた。公平感の得点も2.6点であり、自身にとって不公平な役割を実施しているという感覚も大きかった。育児後「協働型」の女性は、ゴミ捨てを除く家事のおよそ6割から8割を担い、稼ぎ手役割は2割から3割ほどを担っていると感じていた。育児後女性の平均からは1割から2割ほど少ない水準で家事の各役割を実施していると感じていたが、各役割の満足度および公平感の得点は4点に近い値を示しており、実施している役割には満足かつ公平と感じている傾向が示された。

#### 4. 考察

##### 4-1. 役割分担の実践形態

実施している家事と稼ぎ手、育児役割の分担量を変数として投入したクラスター分析を育児期と育児後の男女ごとに行った結果、育児期男性からは3類型、育児後男性からは2類型、育児期女性からは2類型、育児後女性からは3類

型の計10類型のクラスターが抽出された。この10類型の多くに共通する部分は、分業型の形態で役割分担の実践が行われていることである。調査協力者は実施している当事者であるため実施量はやや多めに報告されがちであることを割り引いても、家事役割の約半分以上を実施していると感じている男性の類型は見られず、自身が半分より少ない割合の家事を担当していると感じている女性の類型は確認できなかった。一方で、稼ぎ手役割を半分より少ない割合で担当していると報告している男性類型はなく、半分より多い割合で稼ぎ手役割を担っていると感じている女性類型も確認できなかった。夫婦ともに就労をしている共働き世帯の数が、男性就業者と無業の妻からなる片働き世帯の数を上回って10年以上が経ち（内閣府、2012）、本研究においても女性協力者の約7割は就業者であったが、男性が主に稼ぎ手役割の多くを担い、女性が家事役割の多くを担うという分業型の実践が標準的に行われていたといえる。

分業型の実践が標準的に行われている傾向がみられる一方、すべての類型が完全分業の形態を実践しているわけではなかった。本研究の類型結果をみれば、男性が稼ぎ手役割の多くを担い、女性が家事および育児役割の多くを担うことを基本としながらも、各役割における実施量は類型によって異なり、実践形態は多様であったといえる。例えば、育児期男性においては、稼ぎ手役割の多くを担いながら、ゴミ捨てといった家事の一役割を担うあるいは全体的に一定量の家事を実施する類型が存在した。育児後男性においても、半分には至らないまでも家事役割を担っている割合が大きい類型がみられ、より家事に関与する男性の存在を確認することができた。女性の類型においては、育児期の共働き型や育児後の協働型のように、家事をある程度パートナーに担当してもらいながら、自身もある程度稼ぎ手役割に参加する類型が見られた。

この育児期の共働き型および育児後の協働型の類型は、育児期男性の分業手伝い型や育児後の共働き型の実践形態と対応していると考えられる。また、女性の類型で特徴的であったのは、二重役割の実践形態であったといえる。この二重役割型の女性は、家事を分業型の女性と同程度の水準で担当しながら、稼ぎ手役割も半分に近い割合で担当していると感じていた。稼ぎ手役割を男性が主に実施し、家事役割を女性が主に担当するという形態を維持しながら、これまで男性の役割とされてきた稼ぎ手役割に参加する女性像あるいはこれまで女性の役割といわれてきた家事役割に参加する男性像が、世代を通して存在することが確認されたといえる。

#### 4-2. 役割分担の実践と評価の形態

役割分担の実践の形態においては、育児期と育児後の男女ともに共通する標準的な類型として分業型が存在した。その分業型のなかでも、主に男性のみが稼ぎ手役割を担い、主に女性のみが家事および育児役割を担っている完全分業に近い形態の類型においては、男性は家事と稼ぎ手役割に概ね満足しながら育児役割をもう少し担いたいと感じており、女性は家事と育児役割をより相手に担ってほしいと感じている傾向が確認された。例えば、分業型および分業型から派生した形と考えられる分業一部参画型と分業手伝い型の男性は、家事と育児役割をもう少し担いたいと感じている傾向は示されていたものの概ね家事にも稼ぎ手役割にも大きな不満感を感じていなかった。一方、分業型の女性は、概して家事と育児の役割をもっとパートナーに担当してほしいと感じており、役割分担も自分自身にとって不公平であると捉えがちであった。分業型の類型クラスターにはより多くの調査協力者が集まっていたため、分業形態の役割分担を実践するなかで概ね家事と稼ぎ手の役割分担に満足している男性像と、分業形態の実践のな

かで家事と育児に不満のある女性像は、役割分担実践に対する評価の標準的な傾向として考えることができるだろう。

一方で、家事役割だけでなく稼ぎ手役割をある一定の割合で担っている共働き型の女性も、実施されている役割分担が自身にとって不公平であるという感覚をもち、家事と育児をよりパートナーに担ってほしいと感じている傾向にあった。また、育児後の共働き型の女性、つまり二重役割型の女性においては、稼ぎ手役割に対してもよりパートナーに役割を担ってほしいという感覚が示されていた。この二重役割型の女性は「男は仕事、女は家庭と仕事」といったいわゆる新・性別役割分業（例えば、岡村，1997）に沿った役割分担を実践していたといえる。家事と育児のほとんどを自身で担い、稼ぎ手役割も約半分に近い水準で担っていると認識しており、その二重負担からどの役割にも不満感や不公平感を感じていたことが考えられる。

量的には多くの役割を担っていても、自身の役割分担に大きな不満はなく、互いにとって公平と感じている男女の像もあった。育児後の共働き型の男性は、稼ぎ手役割の多くを担当しながら、家事の各役割を一定の割合で担っていたが、家事や稼ぎ手役割には満足し、全体的にも公平な分担であるという感覚を示していた。育児後の協働型の女性でも、自身は多くの家事を行いながら稼ぎ手役割も一定の割合で担当していたが、大きな不満感は表出されておらず、今回の調査から見出された女性の類型のなかで唯一大きな不公平感を感じていなかった。二重役割型で不満を感じていた女性たちと比べると、認識していた家事負担量もおよそ1割から3割ほど異なり、認識していた稼ぎ手役割の負担量も2割ほどの差はあるが、何が満足感や公平感に大きな差を生みだしていたのかは注目に値する。

各役割の実施量と評価との関係をまとめると、

完全分業で家事と育児を女性が主に担っている場合と、家事と育児も行いながら稼ぎ手役割にも一定量の割合で担当している二重役割の場合に不満足さや不公平感が感じられる一方、育児後男性の共働き型や育児後女性の協働型のように、夫婦ともに性別分業の役割を越えた歩み寄りをみせる形態においては、不平不満が感じられないという可能性が示されたといえる。

#### 4-3. 実施している役割の量的割合と評価形態との関連

実施している役割分担とその心理的評価との関連を検討するなかで、育児期の女性は分業型と共働き型という互いに大きく異なる形態の役割分担の実践を行いながらも、その両者における心理的評価の形態は類似していることが見出された。さらに、育児期の女性の類型においては、分業型であっても共働き型であっても、役割分担を全体として不公平であると捉えており、家事役割と育児役割をよりパートナーに担ってほしいと感じていた。ここでは、稼ぎ手と家事と育児という複数の役割を担っている共働き型の女性と、家事と育児の役割を担っている分業型の女性において、どのように似たような心理的評価が示されるに至ったのかを考察する。

複数の役割を担っている共働き型の女性だけでなく分業型の女性も家事と育児の分担に不満を感じていたということへの説明として、まず複数の役割を担っている方がより精神的な安定を得ることができるという考え方があり得る。柏木・若松（1994）によれば、育児のために退職した母親の育児不安の度合いは、職をもって働いている母親のそれよりも大きいことが示されている。同じことを繰り返し行うという家事および育児役割の特徴（Coltrane, 2000）や、限られたものに集中して接することによる気分転換の難しさなどから、分業型の女性においても不満感や不公平感が抱かれるようになったと考

えることもできる。また、分業型の女性が自身の役割分担に思い入れを強くすることで、負担感が増した可能性も考えられる。稼ぎ手役割を担っていないことで、家事と育児を行うことは自身の役割であるという考えを強くし、助けが必要と感じたときにもパートナーあるいはその他の人たちにも助けを求めないでいたのかもしれない。

こうした分業型の役割分担を実施することで不安感や負担感が増すという視点からみれば、本研究において育児後女性の協働型の類型が示した心理的評価は示唆深い。育児後であるため、差し迫って育児に追われるという状況ではないが、家事役割の多くを担い、稼ぎ手役割を担っている割合が大きくないという点では、育児期の分業型の女性と実施している役割分担の形態が似ている。しかし、育児後の協働型の女性は、実施している役割分担を不公平と感じておらず、各役割にも不満足感を示していなかった。両類型で異なる部分があるとすれば、担っている家事役割の割合あるいは実施している量における2割から3割ほどの差である。この結果から解釈すると、パートナーが2割か3割ほどの家事役割を手伝うということが分業型の女性の心理的評価にとっては肯定的な効果をもつ、といったように考えることができるのかもしれない。あるいは、そのパートナーが2割か3割を担うことで、女性側にも自由になる時間が増えるなどの余裕が生まれ、より満足や公平といった感覚がもたれるようになるのかもしれない。いずれにしても、担当している役割実践の量の大小が、どのように実施している人の心理的評価に影響を与えているのかをより詳細に検討することは、今後の研究における課題となるであろう。

#### 4-4. 役割実践の形態と役割責任意識

最後に、男性が稼ぎ手役割の多くを担い、女性が家事と育児の役割の多くを担う分業型の役

割分担実践が標準的に行われていたという本研究が示した結果に立ちもどり、どのようにその現状が支えられているのかを議論したい。分業型の役割分担が標準的な形態として実践されていることから、男性にとっては稼ぎ手役割を担うこと、女性にとっては家事と育児を担うことが最重要であり、男女ともにそれぞれの役割を責任をもって実践するべきものとする考えが抱かれていることが示されたといえる。妻が家庭責任意識をもってより家事や育児を行うことがあること（中川, 2010; Tichenor, 2005）や共働き夫婦においても夫が主な稼ぎ手として生計維持責任を担う場合があること（小笠原, 2005; 2009）は先行研究でも報告されている。言い換えれば、たとえ家事と稼ぎ手の両方を担っていたとしても、自らが責任をもって担当する役割は男性であれば稼ぎ手、女性であれば家事や育児であり、意識的には性別役割分業に反対する考えをもっていても、責任をもって各役割を実践するかどうかの次元においては、性別分業の形のままで家庭内の役割分担が実践されていると考えることができる。

責任をもつかどうかの次元において性別分業の形態が維持されているのであれば、二重役割型の女性に対応する男性、つまり稼ぎ手役割をパートナーと同等の割合で担っていると感じている男性像が見出されなかったことも理解できる。例えば、ある夫婦において女性側が自身を責任ある稼ぎ手の一人と考えていたとしても、男性側が自身のことを主な稼ぎ手であると認識しているときには、男性側は女性の就労を稼ぎ手役割とはみなさないことがあり得る（小笠原, 2005 前出; Zuo & Bian, 2004）。こうした男女間での認識の齟齬が家庭あるいは夫婦間で起きていたとすれば、同等の水準で稼ぎ手役割を担い合っていると感じる男性が出てこないのも不思議ではない。より包括的な理解をするためには、夫婦のどちらもがフルタイムで就業しているか

どうかだけでなく、就業することが家庭に対してもっている意味（小笠原, 2005 前出）も捉える必要があると考えられる。

#### 4-5. 本研究の限界と今後の展望

本研究で分析に用いた役割分担量の数値は、夫婦間での相対量であり、絶対量ではなかった。各家庭で必要な家事量によって、負担の度合いも変わってくるため、今後の研究では担っている役割の全体量も把握できる調査を行うことが求められる。また、家庭内役割の包括的理解を試みるのであれば、家事、稼ぎ手、育児役割だけでなく、介護役割にも注目すべきである。本研究では分析に含めることができなかったが、今後の研究には介護役割も含めることが求められるであろう。

実施している役割分担の形態ごとに役割分担に対する心理的評価の形態も異なっていたことから、それぞれの役割ごとの分担の量が満足さや公正さに関する判断に影響していることは示すことができた一方、他の要因が関係しながら影響していた可能性も考えられた。今後の研究では、実際の分担量や実践形態を考慮しながらも、何が不満や不公正さを導き、何が不満や不公正さを減退させるのかについてのより具体的な調査が必要となってくる。

#### 引用文献

- Baxter, J. (2000) The joys and justice of housework. *Sociology*, 34, 609-631.
- Blair, S.L. & Johnson, M.P. (1992) Wives' perception of the fairness of the division of household labour: The intersection of housework and ideology. *Journal of Marriage and Family*, 54, 570-581.
- Coltrane, S. (2000) Research on household labor: Modeling and measuring the social embeddedness of routine family work. *Journal of Marriage and the Family*, 62, 1208-1233.

- Dixon, J. & Wetherell, M. (2004) On discourse and dirty nappies: Gender, the division of household labour and the social psychology of distributive justice. *Theory and Psychology, 14*, 167-189.
- Freudenthaler, H.H. & Mikula, G. (1998) From unfulfilled wants to the experience of injustice: Women's sense of injustice regarding the lopsided division of household labor. *Social Justice Research, 11*, 289-312.
- Gager, C.T. (1998) The role of valued outcomes, justifications, and comparison referents in perceptions of fairness among dual-earner couples. *Journal of Family Issues, 19*, 622-648.
- Gager, C.T. & Hohmann-Marriott, B. (2006) Distributive justice in the household: A comparison of alternative theoretical models. *Marriage & Family Review, 40*, 5-42.
- Hawkins, A.J., Marshall, C.M., & Allen, S.M. (1998) The orientation toward domestic labor questionnaire: Exploring dual-earner wives' sense of fairness about family work. *Journal of Family Psychology, 12*, 244-258.
- Hawkins, A.J., Marshall, C.M., & Meiners, K.M. (1995) Exploring wives' sense of fairness about family work: An initial test of the distributive justice framework. *Journal of Family Issues, 16*, 693-721.
- 柏木恵子・若松素子 (1994) 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5, 72-83.
- Kluwer, E.S., Heesink, J.A.M., & Van de Vliert, E. (2002) The division of labour across the transition to parenthood: A justice perspective. *Journal of Marriage and Family, 64*, 930-943.
- Mikula, G. (1998) Division of household labor and perceived justice: A growing field of research. *Social Justice Research, 11*, 215-241.
- Mikula, G., Schoebi, D., Jagoditsch, S., & Macher, S. (2009) Roots and correlates of perceived injustice in division of family work. *Personal Relationships, 16*, 553-574.
- 内閣府 (2009) 平成 21 年男女共同参画社会に関する世論調査. 男女共同参画局. [http://www.gender.go.jp/english\\_contents/category/pub/pamphlet/women-and-men11/pdf/1.pdf](http://www.gender.go.jp/english_contents/category/pub/pamphlet/women-and-men11/pdf/1.pdf) (2012 年 6 月 30 日)
- 内閣府 (2012) 平成 24 年版男女共同参画白書. 男女共同参画局. <http://www.gender.go.jp/whitepaper/h24/gaiyou/pdf/05gaiyou.pdf> (2012 年 11 月 22 日)
- 中川まり (2010) 子育て期における妻の家庭責任意識と夫の育児・家事参加. 家族社会学研究, 22, 201-212.
- 滑田明暢 (2011) 家族内役割分担に関わる適格性概念の整理と検討—対人関係場面における公正判断の理解に向けて. 法と心理, 11, 58-67.
- 小笠原祐子 (2005) 有償労働の意味—共働き夫婦の生計維持分担意識の分析—. 社会学評論, 56, 165-181.
- 小笠原祐子 (2009) 性別役割分業意識の多元性と父親による仕事と育児の調整. 季刊家計経済研究, 81, 34-42.
- 岡村清子 (1997) 主婦の就労と性別役割分業. 野々山久也・袖井孝子・篠崎正美 (編) 「いま家族に何が起きているのか」. ミネルヴァ書房.
- 大野祥子・田矢幸江・柏木恵子 (2003) 男性の家事分担を促進する要因. 発達研究, 17, 53-68.
- 総務省 (2006) 平成 18 年社会生活基本調査. 総務省統計局. <http://www.stat.go.jp/english/data/shakai/2006/pdf/jikan-a.pdf> (2012 年 6 月 30 日)
- Thompson, L. (1991) Family Work: Women's sense of fairness. *Journal of Family Issues, 12*, 181-196.
- Tichenor, V. (2005) Maintaining men's dominance: Negotiating identity and power when she earns more. *Sex Roles, 53*, 191-205.
- 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子 (2003) 「都市環境と子育て—少子化・ジェンダー・シティズンシップ」. 勁草書房.
- Zuo, J. & Bian, Y. (2004) Gendered resources, division of housework, and perceived fairness: A case in urban China. *Journal of Marriage and Family, 63*, 1122-1133.

(2012. 7. 23 受稿) (2012. 12. 6 受理)